

支那の廢佛事件

常盤大定

—

支那の廢佛事件とは、時の王廷から佛教に加へられた迫害で、古來三武一宗の災といはれて居る。佛教者は頗る之を憤慨するのであるが、斯の如き大事件には、必ずやその時代に於て、それ相當の意義があつたものに相違ない。獨、佛教に對してのみ加へられた迫害であるならば、憤慨するのも敢て無理といへぬが、然し迫害は佛教にのみ限られてない。支那の國家自身が、民族固有の道教に對してすら、之を斷行して居るのである。古來の習性に熟せる予は、是等廢佛事件に對して一種厭嫌の情を惹き起さずに居られなんだが、その後次第に調査を累ねて、こ

れには各々然るべき理由がある事に思ひ到り、特に最近の社會狀態の變遷、經濟狀態の激動より、翻つて是等の事件を顧みれば、中には一種の感興を起さずに居られぬものもある。單に厭嫌の情より、之を輕視すべきではない。事件の奥には、今日に對して、大なる警鐘として、吾人の耳朵を聳動せねばならぬものがあるので、この一篇を作つて見る事とした。因みに、三武一宗といふのは、北魏の武帝、北周の武帝、唐の武宗と後周の世宗とである。これ等は、いづれも王廷によりて、支那の一部又は全部の佛教を廢毀したものであるが、この外に、排斥事件が數多くある。上は東晋時代より下は清朝に至るまで、種々の形式によつて繰り返された。中に於て、宋儒によつて爲された思想の上の廢佛の如きは、實は武力の迫害よりも猶恐るべき力であつた。四圍の迫害によつて、一時勢力を失つても、その後に至れば、以前に倍せる反動によりて回復した佛教も、宋儒の思想的廢佛以後は次第に光彩を失ひ、加ふるに元代の道教の懷柔によつて、遂に存在の根柢に動搖を來したのである。清朝の壓迫の如きは唯之を助長したに過ぎぬ。唐宗時代以前の如き存在價值があつたなら、政事的壓迫の如きは、敢て顧慮すべきではないと思ふ。

二

廢佛事件を成せる問題には大略七種ある。

第一は民族的のもので、夷夏問題とでも名くべく内外の區別によつて、之を排斥せんとするのである。

第二は道德的のもので、大略、出家と敬事の二點が各時代を通じて論難せられ、支那の道德的立脚地より、有力なる排佛の理由となつたのである。見方によつては、印度の文化を、支那の文化の下に服従せんとの要求より起つた問題といふ事が出来る。佛教に對しては、隨分手痛き攻撃であり、佛教者は絶えず之に苦しんだ所から、思想の上に於ては、兩文化の調和が出来て居るに關らず、實際の上に於ては、遂に融合を得ず、徹頭徹尾、二つの流を爲して居た。これが實際の上に於てまで、完全に調和したのは、日本佛教の一部のみである。

第三は社會問題である。これは役賦を逃れんが爲に出家するものが多くなる所から起つたので、蓋、時弊の起せる排佛である。

第四は經濟問題である。これは、際限もなく、寺塔伽藍が出来る所から起つたので、これま

た時弊の起せる自然のものである。

第五は宗派的勢力争ひ、または憎惡から來たもので、化胡問題がその中心を爲し、また民族の問題と連環して、夏人には胡神の用がない、不死登仙以外の不生寂滅は、願求すべきものではないといふ上からの排佛である。

第六は思想的のもので、輪廻應報が常に問題の中心となつて居る。餘りに千篇一律であるが上は東晉の中葉に初めて排佛問題の一理由となつて以後堂々たる宋儒の論難に至るまで、思想的排佛問題の焦點として擧ぐべきは、應報に外ならぬのである。宋儒に於ては、道德問題と關聯して、人性に關する論難があり、隨分筆を極めて論難してはあつたが、理論問題としては、宋儒の方に却つて弱點がありはしまいかと思ふ。

第七は國家的のもので、統一の要求から起つた變態現象である。初は必ずしも排佛の意志があつたのではないが、社會的に、また思想的に、國家としての統一を確立せんとする要求から出發して、遂に思の外の排佛となつたのである。若し佛教徒がこの要求に應じたなら、敢て排佛を惹き起すまでにならなうと思ふ。

以上の中、佛教者は、普通に宗教的能力争ひ、または宗教的憎惡を以て、唯一の排佛の理由と

考へて居る。道教と佛教とは、大略その起原を同じくし、常に相反撥しつゝ、また常に相接觸して、原因となり、結果となつて、發達したものであるから、排佛事件には、常に此感情を伴つて居る。然し、これを外にして、或はその以上に、道德問題があり、社會問題があり、經濟問題がある事を忘れてはならぬ。是等は單獨にして、猶排佛の理由となり得たのである。是等道德的、經濟的、宗派的のもの外に數へねばならぬのは、思想的のもので、これの加つた排佛が、最も恐ろしかつたのである。最後の國家統一問題といふのは、或は見遁さるけれども、周の武帝の時のものには、たしかに此要求がその根柢に横はつて居たのである。遡つて魏の武帝の時のものにも、此要求が出發點となつて居たに相違ない。數國家が對立して居た時代に於ては、當然起り得べき問題である。就中、周の武帝の排佛には、國家統一の要求のある外に、思想の背景もあるので、多くの廢佛中の最も注意すべきものである。武帝の方に頗る眞摯な思想と態度とあり、従つて佛者の中にもそれ以上の眞摯な思想と態度とがあつたから、その結果として、國家よりいへば隋の時代の統一が實現し、佛教よりいへば地論・攝論・天台の如き支那佛教史上前後無比の建設時代があらはれた。廢佛事件の刺激が、佛教者を奮起せしめ、この奮起が建設時代を導く機會を與へたのである。

三

第一回の廢佛たる北魏太武帝の事蹟を見るに、種々の原因が錯綜して、之を前掲の七因の一つにきめる事は出来ぬ。此事件の導火線たりし冠謙之が、佛教を評して「勇猛苦教の故にその弟子皆髡形染衣、人道を斷續す」といひ、武帝が「佛教は人情に本づかず、禮義を壞り、王者を視るの法を蔑如する胡法」といへるを見れば、倫常問題の含まれて居る事は明白である。又武帝が廢佛の張本人たる司徒崔浩の言に聞きて、佛教の冗費が人生を毒すといへるは、經濟問題の含まれて居る事を證明する。又、「佛教の虚誕は、漢人劉元眞・呂伯強の假托に出づ。非常の人に非ずんば、非常の事を行ふを得ず、朕能く歴代の偽物を去らん」といへるは、淺薄ながらも思想問題を含む事を示すのである。漢人劉元眞・呂伯強の假托といふ如きは、冠謙之などの言に従へるものであらうが、何の意味やら不明である。劉元眞は西晋の竺潜の師たりし一學者である。當時の道士は、斯る事を以て幼帝を惑はして居たものと見える。又、此事件の導火線たりし道士冠謙之は、道教を儀式的に獨立せしめた豪傑で、先づ司徒崔浩を捉へて新法の外護者と爲し、次で武帝をして登壇受録せしめた程であつて、初には寧ろ佛教に同情せし武帝をして

遂に廢佛の擧を斷行せしめたのであるから、その中には宗派的感情の交つて居る事も勿論である。然し、いよ／＼長安の沙門を誅戮し、佛像を禁毀し、次で諸州に詔して、沙門を少長ともに悉く坑にし、經像を擊破禁除せしめた機會を與へたものは、軍を進めて西征せる際、長安の寺中に飲酒あり、財産あり、弓矢あり、藏物あるを見て、その非法を怒つた事であるから、この廢佛の最大原因は、國家の治安秩序の問題、一層適切にいはゞ統一問題であつたと思ふ。此時、武帝の年は僅に九歳であつたから、武帝の意見といふのは、その實悉く司徒崔浩のものであつたに相違ない。崔浩は西域三韓を征伐した人で、武功の念が強かつた豪傑ではあるが、思想問題などは、了解し得べき素質がなかつたらう。之が爲に斯る甚しき廢佛も、次の文成帝によりて、僅に六年の後、更に大なる勢を以て復教せられ、帝師曇曜の力によつて、東洋藝術の華といはるゝ大同雲岡の石窟寺が築かれ、其後引續きて洛陽龍門の石窟寺を初として、偉大なる堂塔伽藍の建設せられたのを見れば、この廢佛は畢竟失敗に終れりといはねばならぬ。されば、この廢佛には種々な原因があつたが、其中最も大なるものは、國家統一の要求で、而して廢佛宗の方には思想問題に對する了解を缺くといふ缺點があり、また佛教者の方には廢佛に價すべき墮落腐敗の分子があつた事を見のがしてはならない。

四

北周の武帝の廢佛は、恰も北魏の太武帝の後を嗣げるもので、一層明白に國家統一の要求を含み、而も之を修飾するに、一種の思想を以てして居る。その眞摯にして公平なる態度は、此事件に重大な意義あらしめ、多くの精神的佛教者を死活せしめて居る。この死活問題によりて佛教者の頭腦を一洗した事は、決して佛教に取つて不利益ならざるのみならず、その實、これによりて眞の大乗精神を發揮せしめたと見るべき大なる理由がある。北周の廢佛は、佛教史上の一轉機であつて、之を境として、佛教の内容が頗る異なるものあるを來したといつて差支ない。従つて此廢佛こそは、支那佛教史の廢佛事件の花といふべきである。

廢佛せる時の武帝の年は方に三十二歳の少壯有爲の時代で、機辯縱横當り難きものがあり、而してその爲す所には、やゝ正々堂々と見らるべき態度がある。この度の廢佛にもまた「父母の恩重きに、沙門は敬せず、悖逆の甚しき、國家の容さざる所」といひ、その斷肉無妻の如きは、殊に排斥すべきであるといへるを見れば、倫常問題を含み、又、衛元嵩の上表に、「僧衆の多くが財食を貪逐して、欽尙するに足らず」とあるを、武帝が頗る嘉尙せるより見れば、社會

問題をも含み、又、「佛經中、圖塔を崇建するの福をいふも、この無情なるもの、何ぞ能く恩恵あらん。須らく經像を毀滅すべし」といふを見れば、經濟問題をも含むべく、又、初めに、道儒釋の順次と爲さんとし、次で儒道釋の順序と爲さんとせる中には、内外によりて宗教の間に差等を見んとする民族問題をも含むべく、又、北齊の當初より行はれて居た讖記「黑人ありて次で天位に膺る」といふを道士張賓の言によりて、流石の武帝も遂に信するに至れりといふを見れば、道士のいふがまゝに黃老を國祥とし、黒釋を國禁とするが如き迷信分子をも含んで居たと思ふが、然し武帝の廢佛の奥には、老莊の根本原理たる道によりて思想を統一し、よびて以て國家を統一せんとする一大精神あり。而してこの精神を實現するに相當の公平な態度を以てしたのであつた。武帝の思想を最もよくあらはすものは、任道林との問答中に見ゆる次の語句である。

帝王は如來なり、王公は菩薩なり、耆年は上座たり、仁惠は檀度たり、和平は第一精僧なり、貞謹は木叉なり、儉約は少欲なり、放任は無我に同じ、忘功は大乗に逼り文武は二智なり、權謀は巧便なり、加官は授記なり、爵祿は天堂なり、罰戮は地獄なり、民を以て子と爲すは大慈なり、四海を家とするは法界なり、治政に理あるは救物なり、百姓を安樂ならしむるは拔苦なり、殘害を剪罰するは降魔なり、天下に君臨するは得道なり、汪々は淨土なり、濟々は迦維なり、事に即していはゞ、何れの處か道に非らん。

これ必ずや當時北方に行はれて居た「大論」の諸法實相觀より脱化し來つて、之をそのままに内教の根本原理たる道に適用し、進んで之を道中心の國家論としたものである。武帝は、「佛は入聖の期を分てども、道は凡聖に該通すといふ意味からして、道を以て佛よりも一層多く現實的なものと見たので、斷肉無妻を以て殊に非理といへるもこの現實觀よりしたのであつた。

蓋、周武をして斯くまでに現實を重んぜしめたのは、一は南梁の武帝や、北齊の文宣王の上に見られし如き極端なる隱遁生活に對する反動もあらうが、その大なる理由は、朝にして夕を計らざる無常變轉の當時の國狀が、何よりも先づ國家組織の強固を必要とし、之が爲には内教によりて思想を統一する事が先決問題であつた爲であらう。

武帝の廢佛は、同時に形の上に於て廢道であつたが、然しその精神は廢道にあらずして、道によりて思想を統一し、よりて以て國家組織を強固ならしめんとするにあつた。而して之を施設せる跡を見るに、他の場合に見らるる如き暴力によらずして、飽くまで衆議に訴へんとせるは多とすべきである。初、三教徒及文武百官を集めて、道儒釋の順次と爲すべきを議せしむるや、極言を憚らざらしめ、特に大夫甄鸞に勅して、佛道二教の深淺眞僞を辯せしめ、其後自ら三教の先後を辨釋して、儒道釋の順次としたが、佛道二教間の宗派的感情が激越となつて、如

何ともしがたいので遂に二教を並せ廢して、沙門も道士も共に還俗せしめ、更に通道觀を置いて、佛道二教中の名あるものを以て、通道觀學士とし其後、北齊を亡ぼすや、また佛教徒を集めて公然之を廢すべきを主張し、任道林や、慧遠や、曇延の有力なる反對あるに關らず、遂に之を斷行した。斯の如く、勢の激する所、次第に武斷的に走つたが、その初は衆議によつて之を決せんとするにあつたのである。

斯の如くにして、武帝には思想もあり、その態度に堂々たるものがあつたけれども、その道中心たる點、これには當然、内を揚げて外を抑へる意味が加はるのでこれが甚しく佛教徒を激せしめたのである。通道觀、設立の趣旨には「聖哲の微言、先賢の典訓、金科玉篆、祕蹟玄文にして、苟くも黎元を濟養し、教義を扶成せんものは、並に之を弘闡して、一以て之を貫くべし」といふが如き大抱負があつたけれども、その一貫の原理は道であつた事は、通道觀の名稱の上にも明了である。この中に置かれた百二十人の學士は、衣冠笏履を著けて、老莊を學び之によりて三教を通申するにあつたといへば、形の上に於ては道釋二教を廢したけれども、實際の上からいへば、佛教を老莊思想中に統一せんとしたのである。蓋、宗教としての道教を廢し、思想としての道家を揚げたのであらう。斯の如く、帝の處置頗る公平なるが如くであるが

老莊によつて思想を統一せんとする事は、佛教徒を憤激せしめ、この憤激が延いて佛教中に活きくした精神を發揮せしめたのである、此時「大論」學者であつた道安は、通道觀學士に召されしも、之に應せざるのみならず、食せずして終り、同じく「大論」學者であつた靜藹は、諫めて後南山に入りて自裁し「涅槃」學者であつた曇延・靈裕は、諫めて聽かれざるが爲に、山に入りて跡を晦まし、「地論」學者であつた慧遠は、堂々の論議によりて武帝をして答ふる能はざらしめ、同じく「地論」學者であつた曇遷・請嵩・法侃等三百餘人は、南の方、建康に遁れて、佛教者たるの名譽を捨てた。南方の「法華」學者たる智顛が、俄に建康の法筵を去つて天台山に入つたのも、必ずこの廢佛事件の奥に横はれる即事皆道觀に對する佛教的解決を求めんとしたのが爲であらうと思はる。

五

以上の廢佛二件は、佛教史上の注目すべき事蹟であつて、共に佛教を轉回せしむる機會となつたが、その後の廢佛は、次第に價値を失つた様に思はる。少くも佛教徒の中に活精神が乏しかつた。従つて反面よりすれば、廢佛を惹き起すべき弊害があつたものと見えるのである。

唐の武宗の時の、道士の趙歸眞と、爲政者の李德裕との唱和によつて行はれたもので、その結果からいへば、四萬四千六百寺を廢し、還俗者二十六萬五百人の多きに上つた。而も此時唯、知玄一人の堂々たる反抗があつたのみである。この時のには、同じく道德的の意味あり、社會的の意味もあり、それよりも多く民族的の意味もあつたが、主なる原因は經濟的であつた様に見える。經濟方面の廢佛は、蓋、廢佛事件のつまらぬものである。廢佛が一層多くの產物あらしむる爲には、思想方面の根底がなければならぬのである。下りて後、周世宗の廢佛に至りては、全くの經濟的意味のみで、廢寺三千三百三十六、而して像を毀りて錢を鑄るといふが如きに至つては、恰も維新の際に於ける我が廢佛を見るが如きものである。唐武、周宗の廢佛が機會となつて、教宗の外に禪宗が非常な勢を以て勃興した所から見れば、是等の廢佛にも、結果がなかつたとはいへぬが、然し前二件に比すべくもない。猶、下りて宋の徽宗の廢佛に至りては道士の林靈素の言により、佛教の形式を去りて、道教のたらしめんとするにあつたので、其根柢は全く迷信に外ならぬ。是に至りて、廢佛事件はいよゝゝ價値のないものとなつた。反面より見れば、佛教には、社會的意味に於て、經濟的意味に於て、廢佛あらしむべき理由があつたに相違ない。

廢佛事件中には加へられて居ないが、宋代に於ける新儒教徒によりて加へられた駁撃は、その實最も畏るべき廢佛であつた。この駁撃によつて實は一層偉大なる佛教が出来ねばならぬ筈であつたが、此時代に於ける佛教といへば、殆んど禪宗あるのみで、教宗は衰微の極にあつたので、思想としては何等の成果もなくして、獨、支那のみならず、延いて朝鮮の廢佛となり、下りて日本に於ける儒教の廢佛となつたのである。禪宗の實際方面に於ける、功果は偉大であるが、之に伴つて思想を重んずる教宗の重要な事はいふに及ばぬ。

六

廢佛問題の最初は、民族的のものであつた。即ち、後趙の王度及び東晉蔡謨の佛夷人説は、南北、時を同じくして擡頭し、下りて南宗の顧歡の夷夏論となつて、教界の大問題となり、其後、歴史を通して絶えず繰り返された。これは、内外の區別によつての廢佛である。次は、道德的のものであつた。即ち東晉の庾氷及び桓玄によつて提出せられた敬事問題、南齊の張融によつて提出せられた出家問題で、これまた其後の歴史を通じて繰り返された。これは佛教を支那文化に服従せしめんとするのである。次は、社會的のものであつた。前秦の符堅や、後趙の石

虎の時に起れる沙汰問題の本となつたものは、逃役の爲に出家せる遊民の多かつたが爲である。次は經濟的のものであつた。これは、殊に後魏の晩年より著しく表はれたもので、冗費の多端なるは、前の逃役と共に、たしかに弊害であつたと思ふ。次は國家的のものであつた。これは後魏の太武帝や、周の武帝の事蹟の上に於て見らるゝ所のものである。次は思想的のものであつた。その初は東晉の桓玄の無應報・無後生説などの上に見らるゝが、これは淺薄なもので、趙宋の新儒教徒によつて爲されたものに於て、やゝ深度を加へた。次は宗派的のものであつた。これは、いづれの廢佛にも、多少之を伴はぬはなかつたが、然しその最も著しいのは、趙宗の徽宗の時のものである。

是等の中、國家的のものを除けば、その他の六種は各時代を通じて、絶えず繰り返されて居る。六種中、宗派的のものは、打つものも、打たるものも、共に罪がある。社會的・經濟的のものは、その時代に於て、打たるだけの弊があつたに相違ない。民族的のものは、其根柢深いけれど、然し唐宋の如き統一ある大國家を通じて後、元代に至りては、早や之を攻撃するに及ばぬ。換言すれば内外の區別によりて排斥するは無意義といふまでに、佛教の支那化を見るが獨、道德問題は支那に於ては遂に未解決に終つたといふも差支はない。或はいふべし、佛教は老

莊思想を服従したけれど、思想の上からは、よし淺薄であつても、人世に取つて重大の意義ある儒教道德とは、遂に根本的の調和を爲さなんだのであると。宋儒の攻撃中、最も佛徒をなやましたものは、この道德問題であつたといつてよい。佛教と儒教道德との關係問題は、實に我が日本に残された未解決のものゝ一つであると思ねばならぬ。

行李忽々、推校の暇なきを、大方諸彦の宏量に訴ふ。渡清の前夜、九月二十三日夜三時擱筆